

思い出の語り部の方々(鳥取県)

酒井 董美^{ただよし}

先に島根県の「思い出の語り部の方々」について記しておいたが、筆者は隣の鳥取県でも口承文芸を収録しているので、今回は鳥取県版を書くことにしたい。

思い出の方々はいろいろあるが、残念なことに手元にご本人の写真が見当たらない。ただ片桐利喜さん(明治30年生・西伯郡大山町高橋)の一枚だけが残っているのでこ



西伯郡大山町高橋の片桐利喜さん(明治30年生)

れでお許しいただきたい。

それでは代表的な語り手を東部から述べることにする。

何と言っても八頭郡智頭町波多の大原寿美子さん(明治40年生)が印象に残っている。関敬吾『日本昔話大成』にも出ていない「一斗八升の米」の昔話はすばらしかった。筆者は大学での講義や講演などで常に紹介させていただいている。他に「大歳の客」「聞き耳頭巾」など多数の民話をうかがった。

中部では三朝町大谷の山口忠光さん(明治40年生)から「猫檀家」「庚申さんの福」「猿婿入り」などを聴かせていただいたが、豪放な語りでありながら、男性としては実にキメの細かい語りをなさる方であった。一方、女性としては同町吉尾の別所菊子さん(明治35年生)からも「似せ本尊」「馬子と山姥」などをうかがっている。

西部では写真の主である片桐利喜さんから「狐の敵討ち」「赤松の池の大蛇」「身代が上がる話」などをうかがったが、驚いたことにいわゆる雲伯方言、つまり見事なズーゾー弁であった。筆者としては鳥取県西部にこのような方言を使う方がいるとは想像もしていなかっただけに、まるで地元の出雲地方に帰ったような親しさを感じたものである。彼女は電話などで訪問の打ち合わせをしておく、ノートなどにご存知の昔話のタイトルなどを記帳しておいてくださり、親切に対応していただいたものである。

また、男性の語り手としては米子市観音寺の浦上金一さん(昭和3年生)も忘れてはならない方である。「富山の薬売りの化け物退治」「化け物問答」「藤内狐の尻焼き川由来」などをうかがっている。これまた豪放磊落な語りと形容すればよいような、鮮やかな語りである。

これまで民話の語り手として鳥取県内を眺めてきたが、多くの語り手に共通して言えることは、昔話を語る方々は同時にわらべ歌などもよく知っておいということである。例えば東部の大原寿美子さんの場合、昔話などの民話は67話も語っていただいているが、わらべ歌も24曲うたっていただいた。その中でも手まり歌の「おさよと源兵衛」の歌は、20番まで知っておいでだったのに驚いた。普通聴けるのはせいぜい10番止まりなのである。他のの方々については省略するが、傾向としては同様のことが言えるのである。